
無垢な頃

kazuya

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無垢な頃

【Nコード】

N3613D

【作者名】

k a z u y a

【あらすじ】

一通の封筒によって僕の日常は少しずつ変わり始める

序章（前書き）

初！

連載作品です！

とりあえず完結させることが目標です！

評価・感想もぜひお願いします！

序章

桜はもうすべて散り終えて、青々とした葉がいつせいに茂りだす。僕はこの時期の桜が好きだ。そう、青春の色に見えるからだ。大人になってからはそんなこと思わないかもしれない。でも教室の窓からみえるその勇敢ともいえる青葉の桜の立派な姿には圧倒されるのだ。僕がこつこつこの姿に憧れるのは、僕の青春の理想が叶っていないからかもしれない。この高校に入学してからはずっと退屈だった。毎日同じ時間授業を受け、友達と他愛のない話をし、部活動に参加していない僕はそのまま帰る。友達に何度も部活に入るよう勧められたが、集団に属するのが基本的に苦手で面倒に感じる僕はその誘いに乗らなかった。青春を謳歌したいなら部活というのはわかっている。わかつているけど面倒なのはいやだ。そんな自分勝手な論理を展開しながら毎日をこなしている。青春といえば部活以外にあるじゃないか。そうだよ、いちいち言わなくてもわかるだろう。そうだよ、漫画とかドラマの世界でよくあるやつだ。

そうだよ、そうだけだ。

でも僕にはルックスが足りていないし、テクニクも足りていないし、努力すれば報われる的なものは存在していない。僕がその証明だ。告白しては振られ、また告白してはまた振られ。断られる理由はいつも決まっている。「そういう対象にはならない」その一言だけ。今にも顔がムンクの叫びになりそうだ。

「なんかいいことないかな」

それが最近の口癖になりつつある。窓の外には手をつなぐ恋人達が何組も見えるというのに。窓から教壇のほうに視線を移すとまだ担任の先生が話を続けている。早く終わってくれ。始業式の日はこのクラスの中に自分の名前を見つけ、ほぼ同時にクラス担任がこの先生だとわかった瞬間テンションは急落した。とにかく話が長い。他のクラスが掃除を始めていても、掃除が終わわり、生徒達が部活に

行ったとしても、話が続けていることがある。毎日毎日いつたいどこからそんなに話を仕入れてくるんだ。その努力は一刻も早くやめてもらいたい。

「よし、じゃあ今日はこの辺で終わろうか」

教室の時計を見、話し終えた満足感でいっぱい担任の顔で僕の長い高校での一日が終わる。みんなが立ち上がり先生に礼をし、掃除当番以外はいつせいに教室の外へ出る。そして僕も出口から一番遠い席からみんなに続く。その出口まで行くほんの数メートルの間に必ず友達が声をかけてくる。中学からの親友、鈴木優だ。

「途中まで行こうぜ」

部活によりおそらく青春を謳歌しているであろう優と学校の門を出るまで歩くのが、毎日の日課になりつつある。

「帰ってもヒマだろ？部活入れよ」

「入らないよ、前から言ってるだろ」

「集団が苦手とか何とか言ってお前もしかしてコレがいるんじゃないか？」

僕は優の立てている小指を手で制して

「いるわけないだろ、あゝ早く欲しいな」

「まあまあ、そう焦るなつて。そうだ、バイトとかどうだ？」

「バイトかあ、バイトねえ」

「集団は集団だけど金が入るじゃん、そして俺になんかおこつてくれ」

「そんなことだろうと思ったよ、仮にバイトしたとしても何もおこらないよ」

「なんだよ、ケチだな」

「なにがバイトだ」

その声に僕と優はビクツとした。生徒指導の先生だ。アルバイトって校則違反だっけ？

「いえ、何でもありません……じゃあ俺はこっちだから、バイバイ」

優がすごいスピードで駆けていく、そういえば彼は陸上部だった。
「さ、さようなら」

置いていかれた僕はすぐさま門を出た。少し走っただけで息切れがひどい。まだ高校生なのに情けない。何か運動しないとまずいな。そう考えるのも門から駅までの道のりですべて忘れてしまう。いつもそうだ、いろいろ考えてみるものの、それを実行せずに退屈な日常にすぐ戻るのが僕の悪いところだ。

わかってる。

そしてまた「何かいいことないかな」と帰宅ラッシュの中、車窓を見ながら思うのだ。ドラマのように何かのきっかけで何かが始まるみたいなことを想像してため息をつくのだ。

僕の降りる駅が近づいてきて、かなり人も減ってきた。日によってはシートに座ることも可能になるが、今日は無理なようだ。仕方なく見慣れた景色を眺め続けるのだ。そして降りる駅に着くと学校帰りの自分とは別の学生服を来た高校生カップルとドアで行き違いになる。この二人にとっては、今まさに沈もうとしている夕日は口マンチックなのかもしれない、しかし、僕はこの夕日から寂しさしか感じられないのである。

「なんかいいことないかな」

心の中でまた言ってしまった。ここから15分くらい歩いて我が家につけば、またいつもと変わらないときが過ぎ、そしてまた明日いつもと変わらない朝を迎えるのだ。

第一章

目覚まし時計の故障ではなく、おそらく無意識に僕が時計を止めたのだろ。母親の怒鳴り声で目が覚め、時計を見て心臓が止まりそうになり、大急ぎで顔を洗って学生服を着て家を飛び出した。

僕は朝が弱い。

幼い頃からずっとそうだったから仕方ない。漫画じゃないので食パンをくわえながら登校できないため午前の授業は空腹との戦いになることが多い。それにまさか食パンをくわえながら電車には乗れない。今日起きた時間より少し早く目覚めていれば朝食は食べるこ

とができないにしろ、コンビニで何かを買うことはできたのに。

今はそれどころじゃない。

でも焦っても電車は焦ってはくれないから、携帯電話の時計を何度も見ながら電車を待つ。いつもは僕と同じ制服を着たやつがちらほらいるが、今日に限って皆無であった。しかし焦りは次第に諦めへと変貌していく。その決定打がこのホームに流れるアナウンスだ。

「次に到着の電車踏み切りのトラブルにより少々遅れます、お急ぎのところまことに申し訳ありません」

とつさに遅刻の理由について電車が遅れたからだと言いつつと思っただ、この電車がダイヤどおりについても結局始業時間に間に合わないことに気づき、あきらめることにした。僕は決して遅刻をして先生に注意を受けるのがいやなわけではない。授業がすでに始まっている教室に遅れてはいるのがいやなのだ。みんなの視線をいっせいに受ける気持ちの悪さがいやである。そういう視線が大好きな人も世の中にはいるようであるが、僕はそのような人間ではない。携帯電話の時刻が時刻表の時刻をちょうど十分こえた頃、僕の前に電車が到着した。

「どうしたんだよ、また寝坊か？」

優がニヤニヤしながら聞いてくる。

「電車が遅れたんだよ」

うそをついても仕方ないのにうそをつく。僕と優は学校に来る日は毎日この学生食堂で昼食をとり、そのまま五時間目の予鈴までまるで中身のない話をする。

「今度のテスト、ホントやばいなあ、古典の授業大体寝てるからなあ」

「自業自得だよ」

「そういうお前はどんなんだよ」

「テストは前夜が勝負だ。今は何も考えてないよ」

「出た、一夜漬けマニア」

僕はテスト一週間前でみんなが本腰を入れても実際何もしない。テスト勉強はテスト前夜から始まるのだ。一夜漬けマニア？なんとも呼べばいい。これで結構いい成績が取れているんだ。テスト当日の午後は吐きそうになってるけど。

「僕は短期集中型だから」

「ふーん、夜中は寝るもんだと思っている俺には無理だ」

「今からこつこつやればいい、そうだ、今度のテスト勝負しないか？負けたら昼おごりで」

「えー、勝負するならハンデくれよ、50点くらい。一年のとき、そのくらい差があつたら？」

「50はきついな、10ならいいぜ」

「10点なんてほとんど変わらないだろ。あ、そうだ。テスト全部の合計じゃなくて俺が教科を三つ選んでその合計で勝負っていうのはどうだ？それならハンデは無しでいいぜ」

優も考えたな、たぶんその三つは

「じゃあ数学、物理、生物で」

やっぱり。

優はいわゆる理数科目にはなかなか強い。というか、一年のときにあった僕との合計50点の差はすべて英語や古典の大幅マイナス

ポイントが乗っていったからなのだ。僕は理数系はあまり得意ではない。数学はまだ大丈夫か、問題は物理だな。

「決定、この教科で決定」

高らかに優が叫ぶ。今回も一夜漬けフル稼働だな、こんなことしてるから朝が弱くなるんだよというツツコミは伏せておこう。

「そろそろ予鈴鳴るから教室いくか」

「そうだな」

二人立ち上がったときに聞き覚えのあるメロディが流れた。優の携帯だった。

「おっと、マナーにするの忘れてた。危ねえ、授業中じゃなくてよかった」

「誰からだ？」

「誰でもいいだろ」

「お前こそコレか？」

昨日の帰りに優がやったポーズと同じポーズをとった。

「違うよ、そんないいもんじゃない。ほら予鈴なってるし。さっさといくぞ」

「はいはい、わかりました」

僕は優のメールについて面白い想像をめぐらしながら小走りに階段を上がり教室に向かった。退屈な日々にはそんな些細な想像をするのが結構面白い。

午後の授業が始まった。昼食後の英語の授業はこれでもかと思うくらい眠気を生む。幸い今日は一度も当てられずにすんだ。当てられたとしても何も答えられないから一緒ではあるが。本日最後の授業である世界史はビデオを見た。

いや、見ていない。

そのかわりに夢を見た。

幼馴染で中学まで同じ学校だった女の子が出てきた。夢の内容は覚えていない。ただ笑っている幼馴染がそこにはいた。笑っている

けどなぜか手をグーにして僕の頭を小突いてくる。

なぜ？

どうして？

目を覚ますとそこには可憐な少女ではなく、中年の男性教師が僕の頭部軽くはたきながら、起きろというメッセージを視線で伝えてきた。

あつ。

と間抜けな声を出した僕を待ってたかのように終了のチャイムが鳴った。今日はあまりいい一日ではなかったが、まあそんなものだろうか。明日は目覚ましを三つセットしよう。ちなみに今日は二つセットしていた。

机から教科書、ノートを取り出し、置いておくものとかばんに入るものに分ける。理想としては全教科を机の中において帰りたいが、そんなに容量がないので仕方なくいくつかかばんに詰め込む。

そのときにひらりと一枚の封筒が落ちた。

なんだったけ？ と思いながら拾うと僕宛の封筒であることがわかる。それはまあ、僕の机に入っていたからそれはそうであるが、封筒にきちんと僕の名前が書いてあったから間違ってこの机に入ったものではないだろう。こんな封筒もらった覚えがないなあ。

なんだろう。

そう思っ封筒を破り、中の手紙らしきものを引き抜いた瞬間、すぐさまその手紙らしきものを封筒に戻しそのままかばんの中に放り込んだ。汗が出ていた、冷や汗に近いかもしれない。教室を早く出たかったが担任が毎度恒例のホームルームを始めた。しかし会議があるらしくそうそうに話を切り上げ、みんなで挨拶をしそろそろと教室を出て行った。

ラッキー。

そう思ったがやはり優が声をかけてきた。ここは平静を保とう。

「今日世界史のとき寝てたろ、結構みんな気づいてたぜ。起きたときのお前の反応面白かったあ」

「はいはい、そうですか」

教室から出て階段を降り、靴を履き替えるまで話題が居眠りに限定されており、何人かのクラスメイトも茶化してきた。僕は適に対応をする。僕はあくまで普段どおりのはずだったのに。

「お前、今日なんかおかしくない？食堂のときは何も思わなかったけど」

どうして気づくんだ、この男は。

「別に何にもないけど」

「そうか、なんかおかしい気がするんだよな、どうか体調でも悪いのか？」

ナイスな言葉だ、よし、そういうことにしておこう。

「ばれたか、そうなんだよ、ちよっとおなか痛くてさ。家に帰って薬飲むよ」

「そうか、まあ気をつけろよ。じゃあな、また明日」

いつもと同じように門の手前の分かれ道で優と別れた。

門を出て駅まで向かう間、あの封筒のことを考えていた。かばんを開ければすぐに取り出せるが、ここでは無理だ。家に帰ってじっくりと読みたいところだ。封筒から手紙を出したときのあの驚き。やつと僕にもやってきた青春。可愛らしいキャラクターの便箋に丸い文字。

きつとアレに違いない。

おつとやばい、やばい、表情筋が緩みすぎてにやけてしまいそうだ。顔に力を入れる。駅のホームで電車を待つ間も電車に乗ってからもその電車を降りてもそのことだけ考えていた。

でもいったい誰だ？

しまった、あのときに差出人の名前だけでも見ておくべきだった。でもこのドキドキ感はずまらないな。いや、ちよっと待てよ。これは誰かのイタズラかもしれない。いわゆるドッキリだ。その考えを消すように僕はかぶりをふった。そんなことは帰ってから手紙をじっくり読めばわかるじゃないか。それにもうすぐ家に着く。全速力

で走って帰れたかったが、僕はあえていつもと同じように帰った。
そのほうが優越感が増すような気がしたからだ。

家に着いてからもいつもと全く同じように「ただいま」を言い、
自分の部屋に入り、かばんを置いた。そしてそこからが違う。大急
ぎで封筒をかばんから取り出し、勉強机の上に置き、いすに座り、
ひとつ深呼吸をした。

封筒から手紙を取り出す。

それは間違いなくラブレターであった。

第二章

今日は日曜日なのに普段では考えられないくらい早く目がさめた。まだ六時にもなっていない。目覚ましは八時に鳴るはずだった。階段を降り、洗面所へ行く。顔をいつもよりしっかりと洗う。まだ誰も起きていない我が家は新鮮であった。平日にしろ、休日にしる、家族の中で一番朝起きるのが遅い僕にはかなり貴重な体験である。

早く目がさめたのはいいが、昨日眠りについたのはそう早くもなかった。

眠れなかったのだ、あの手紙を何度も読み返し、さまざまな想像をめぐらし、気づけば深夜一時は過ぎていたと思う。だから正確に言えば深い眠りに入ったのは昨日ではなく今日なのだ。そしてその手紙の人物に会うのも今日なのだ。

鏡に映った僕の顔はお世辞にもイケメンとは言えない。僕は手のひらで頬を叩き、リビングへ向かった。特にすることもなく冷蔵庫から牛乳を取り出しコップに注いだ。そしてまた手紙のことを考えていた。

はつきり言つて僕には何の心当たりもない。特にクラスの女の子と仲良くしているわけでもなく、仲良くされているわけでもない、ということとはクラスの中に僕の影のファンがいたことになる。ただクラスの女の子とは限らない。別のクラスの子かもしれないが、全く心当たりがない。そして誰かのイタズラの線も消えてはいない。こんなことを考える度に心臓が僕の皮膚を突き出るのではないかと思うくらい鼓動する。実際とてもドキドキしている。期待もあるが不安もある。ここまで来ると早く会ってしまつて楽になりたいのだが、待ち合わせ時間は午後二時、あと八時間もあるのだ。

結局妙に静まり返つたりリビングは居心地が悪く、また部屋に戻り、僕は机の引き出しから再度手紙を出し読み返した。

『私には勇気がないのでこうやって手紙を書くことにしました。でも何を書いていいのかわかりません。だからとにかく言いたかった一言だけ書きます。あなたのことが大好きです。それだけです。普通はここに自分の名前を書くんだろうけどやっぱりなんだか恥ずかしいです。その代わりといってはなんですが、今度の日曜日会ってくれませんか。待ち合わせ場所はあなたがいつも使っている高校の最寄り駅で午後の二時に。もちろんこの手紙があやしいとか他に好きな人がいるんだったら来てくれなくてもかまいません。では日曜日の午後二時待ってます』

読み返してまた思う。

名前さえ書いてくれていれば、こっちも心構えができたというのに。

しかし「来てくれなくてもかまいません」の部分により、イタズラの線は僕の中では薄れた。だからといって可能性ゼロというわけではないが。あの手紙を発見したときから、ぼやつとしたイメージが僕の中で現れたり消えたりを繰り返していた。

それは幼馴染の姿だった。もちろん待ち合わせ場所が高校の最寄り駅となっている以上この手紙の主は同じ高校の人物であろう、それが本気であれイタズラであれだ。だからそんなわけはないと頭の中で思っているにもかかわらずそのイメージは消しても消しても浮かび上がる。

僕は自分でわかっているのだ、その手紙の差出人が幼馴染の五十嵐圭であればいいのに思っているのだ。

小学校のときは彼女とよく遊んだものだったが、中学生になりその機会は減った。どっちがどうしたからというわけではなく、ごく自然にだった。しかし昔から知っているということもあり、たまにはあるが話をしたりした。簡単な近況報告というところだっただろうか。二人が別々の高校へ行くと知った僕は彼女に何か告げるべ

きであった。すごくありがちな使い古された言葉を。しかしその言葉は僕の口から出ることはなく、だからもちろん彼女の耳に入ることもなかった。僕は彼女に「じゃあな」としか言わなかったと思う。彼女は僕のことをどう思っただろうか。もともと僕のことなんてただの幼馴染としか思っていないかったかもしれない、そのほうがいい。そうでなかったとしたら、僕はすごい後悔をすることになる。もうかなり前に過ぎてしまった話なのにいつまでもこの心の奥の隅に浮かぶのはなぜなんだろう。

僕は圭のことが

「いつまで寝てるの」

目覚まし代わりの母親の声が響く。どうやらまた眠ってしまったていたらしい。

時計は一時をさしていた。

母親に出かけることを伝え、手紙が夢でないことを確認し、急いで家を出た。なんか最近こういうのが多いな、もっと時間に余裕を持った生活をしないと。

駅につくとちょうど電車が来ていた。この分なら約束の時間までには必ず着く。今日は踏み切りの故障は起きないでくれよ。吊り広告を見ながら祈った。

幸い何のトラブルも起きることなく目的の駅に着いた。まさか学校が休みの日までこんな場所に来るとは。でもポケットの中の手紙を思ったらいつもの駅の光景がまるでドラマのワンシーンのようにも感じられるのだ。なんでも気持ちの持ちようとはよくいうけれどもなるほどなと思った。

改札機に定期券を通し、時計を見る。

一時四十分。

少し早くつきすぎただろうか。駅を出て少し辺りを見回してみる

が僕が探すべき人は見つからなかった、というのもそこにいたのは
いかつい格好をした兄ちゃん和白いひげを生やした老人、世間話を
しているおばさん二人であった。この中に該当者がいても困るなと
思っ て仕方なく僕はあと十数分待つことにした。何もすることがな
い状態で待つというのは予想以上に時間がたつのが遅い。しかし一
分たつごとにやはり緊張は増していく。電車の中や駅を降りてから
はさほど緊張感はなかったのにここにきて突然増してきた。それは
たぶん現実味を帯びてきたからではないだろうか、今この情景で間
違いなくドラマが始まるのだと、数分後には全く違う世界が始まる
のではないかと。

僕は空を見上げた。

初夏の心地いい快晴の空だった。

少しして向こうのほうから僕と同年代くらいの女の子がやってき
た。僕は直感的にこの手紙の人物だと察した。しかし全く見覚えが
なかった。

女性は茶髪に、若い女性歌手がしているようなサングラスをかけ、
ジーンパンをギリギリまで短くしたようなボトムス、アイラブなんと
かと書かれたＴシャツ、つまり典型的ギャルだった。僕はそっち系
とは全く関わりがない。

「あなたですか」

まだこの女性だという根拠がないのにもかかわらず、僕はつい聞
いてしまった。すぐにしまったと思ったが、

「はい、私です。如月愛といいます」

表情を薄く緩ませて彼女は僕に名前を告げた。

「如月愛さん、ですか」

僕は何を言っているかわからず、ただ彼女の名前を反復しただけ
だった。

この状況も何か変なので僕と如月愛はどこか座って話せる場所と
いうことでファーストフード店に向かった。

高校の知り合いがいないことを願って。

お昼も過ぎた頃ということもあり店内はまばらであった。彼女に注文を尋ねると「コーヒー」と言ったので「コーヒー」を二つ注文した。この店はよく来るがハンバーガーを頼まなかったのは初めてだと思う。僕は彼女に会う前はいくらなんでも自分が全く知らない人は来ないだろうと思っていた。なぜなら僕と何のかわりもなしに好意を持つてくれるというのはほぼ皆無だろうと思っていたからだ。もちろん一言も話したことがないとなるとやはり僕の見た目ということになる。となると僕はもっと自分の外見に自信を持っていたいのだろうか。外見に関してはコンプレックスしか持ったことがない僕でも、そんなつまらないことを考えている間にすぐに「コーヒー」が二つプレートに乗せられた。お金は僕が払った、たった数百円だが女性になにかおごるといふのはいいものだということを知った。席について「コーヒー」を一口飲み、さて第一声何と言おうかと考えていると、

「来てくれてありがとう」

彼女がまず口を開いた。

続いて僕も緊張で声が裏返らないよう注意しながら

「こちらこそ手紙ありがとう、でもひとつ、失礼なのは承知で聞くけど、あなたは僕とどういつながりがあるんだろう？もしかしたら僕が忘れていただけかもしれないけど」

彼女はうつんとかぶりを振って答えた。

「私のことを知らないのは当然かもしれない、私は中学のときあなたの隣のクラスにいただけだから」

「隣のクラス？」

自分のクラスでさえクラスメイト全員を思い出すというのは困難になりつつあるのに、隣のクラスといわれればはつきり言って数人しか出てこない。考え始めた僕を見ながら彼女は続けた。

「そんなに考えなくても知らなくて当然よ、本当は中学の間にあなたに手紙のことを伝えたかった、でも」

僕は自分の頬が赤くなっていることがわかる。恥ずかしくなつて

またコーヒを口に含んだ。必死に声を振り絞って聞いてみた。

「どうして僕なんだろう？」

そんなこと聞かなくてもいいのに心の声がそういった、しかし知りたかった。だが返ってきた答えは

「雰囲気かな」

「雰囲気？」

「いや、それとも違うかもしれない。フィーリングっていうのかな、こんなことを言っちゃ悪いけど、あなたのどこが好きとかそう言っのじゃなくて、理由っていわれても説明できない」

「そう、なんだ」

僕は彼女にどういつて欲しかったのかわからないが少し中途半端な気持ちになった。

「それでね、どうかな？私と付き合ってくれる？」

「え？」

いきなり本題に入られ言葉に詰まった。そうだ、彼女は手紙に対する僕の返事を聞きたくて今ここにいるのだ。僕は少し考えた。彼女と付き合うことについてではない。どうしても知りたいことがあった。

「もうひとつきいていいかな」

「いいわよ、何でもどうぞ」

僕はききたいことを改めて整理し、彼女に問いかけた。

「君と僕は中学校は同じだけど高校は違うよね。どうして待ち合わせ場所が僕の高校の近くの駅なの？それにどうやって高校の僕のクラス、僕の机を知っている？そしてどうやってその手紙を僕の机に入れたんだい？」

彼女に会うまで、彼女と僕の関係を知るまではプラスのドキドキしかなかったのに、ここにきてどこか不安にも似たドキドキが押し寄せてきた。だっておかしいじゃないか。冷静に考えてみると恐ろしくもなってくる。少々強い口調で言い過ぎたかと思ったが彼女の態度は柔らかいまま

「高校には忍び込んだ、クラスは知り合いから聞いたし、座席表は教壇の机に張ってたし」

そう笑顔で言うもんだから、「そう」と間抜けな返答しかできなかった。

「え？忍び込んだって？学校の部外者が簡単に忍び込めるのか？」

「日中は無理よ、夜中に門を飛び越えて」

「は？」

「警備員もいないしね」

僕は周囲に目をやった。今の会話の音量は大丈夫だっただろうか、誰かに聞かれていたらまずい内容のような気がするし、彼女のように笑顔のままする話でもない。

「でも力ギは門は飛び越えられても肝心の教室にはどうやって入るんだ？」

「ねえ？」

「ん？」

「そうやって私の質問に答えないまま終わろうとしてるんじゃない？」

「質問？」

「だから私と付き合ってくれるの？はっきりして欲しいな」

「それはもちろん」

「OKね」

「うん」

半ば押された形で承諾した。これでいいはずだ。断る理由がないのだから。

そして如月愛は僕にメールアドレスを紙に書いて渡し、「そろそろ帰らなくちゃ」と告げてあっさり去っていった。僕のことを好きになってくれたからだろうか。理由はわからないが、気づけばプラスのドキドキしか僕の体内には残っていなかった。彼女のアドレスの書いた紙をポケットにそっとしまい、少し残っていたコーヒーを一気に飲み干し、店を出た。

第三章

今日は時間に遅れる心配もなく待ち合わせ場所についた。ただ少々早く着きすぎたかもしれない。

今日如月愛に会える。

その嬉しさが空回りしすぎたからかもしれない。

いつもはあまり着ないジャケットの類を羽織っているからなんとなく体がむずがゆい。

約束は前と同じ二時、現在十二時五十三分。いつまで持つかわからないが仕方なく携帯電話の画面を見て過ごす。音楽配信のサイトやニュースサイトに目を落としボタンを順々に押していくがその内容は全く頭に入っていない。電源ボタンを押して元の待ち受け画面に戻る。時計はいつもの十倍遅く進むのだ。会いたくない人に会うとき待ち時間はすぐに過ぎていくのに。どうしてだろう、無性に会いたい人を待っているとときはどうしてこうも数字は動いてくれないのだろうか。

如月愛と出会ってからちょうど一週間が経った。

もちろん平常どおり高校生として生活している僕、いや、僕らがゆっくり会えるのは休日しかないのだ。それに彼女は土曜日アルバイトをしているらしく、会えるのは一週間であつた一日しかない、一ヶ月にたった四日、とても貴重だ。そして会えない時間が長くなると会いたいという気持ちが増えていくという当時はあまり実感がわかかなかった有名なラブソングの歌詞の意味についてこの一週間で理解することができたのだ。しかし今まで退屈で空虚だった日々の中に一週間にたった一日でもこんな日があるとそれ以外の日々も変わってくるのだ。

「最近、何かいいことあつたのか？」

優は必ず見抜いてくる、今週の月曜日、つまり彼女と会った翌日

にだ。

「別に」

僕はここで優に言ってしまったてもよかったのだが、それじゃあ少しつまらなかったのだから「何にもないけど」

このまま会話が続くといういろいろ訊かれそうなのがしたので、全く心に思っていなかったが、

「おまえこそ何かいつもと違うぞ、何かいいことあったのか？」
そう適当に訊いてみたら

「そ、そんなことない」と、どこか焦った返事をしてきたので、僕は少し驚いた。

まさか優にも、か？

僕はそれ以上何もきかなかった。こっちに返ってくるのがいやだったからだ。

僕の表情は簡単に優に読み取られるが、優の表情を僕が読み取れるということはない。

それは単に僕が感情の起伏が激しく表情に出やすいが、優は比較的表現の上では感情の変化はあまり見られないからだと思う。

当たり前だが優にもやはり心の奥底ではいろいろ思っていることがあるんだろう。さっきの焦った表情がその証明だ。

そんないつもと少し志向の違う会話を終えると、またいつもの会話に戻る、そして校門まで歩く。

そんなほとんど変わらない日常も僕には少し明るく見える。

高校生のカップルを見たって、政治問題のニュースを見たって、授業が難しく退屈だとしてもだ。

一時五分、全然時間が過ぎていかない。

今日は彼女が見たい映画があるということで街中まで出てきた。いつも利用する駅と何が違うって人の量だ。電車が駅に着き扉が開くたびに多くの人の波が押し寄せる。改札口を待ち合わせ場所に指定された僕はその光景に参ってしまう。

というのも自宅に近い駅も高校の最寄り駅も比較的小さな田舎の駅だからラッシュの混雑も知れている。だからこんなに大勢の人が行き交うと人に酔ってしまいそうになるのだ。

よほど大事な用がない限りはこんな場所には来ないのだが今日はよほど大事な用があるので胸を躍らせながらやってきたのだ。たとえば彼女が待ち合わせ場所を薄気味の悪い孤島にしたとしても僕は必ず一時間前にはその場所に到着していることだろう。

今僕は幸せなのかもしれない。

これがまさに今まで僕が求めていたものなのだ。
さあこの退屈な時間をどうしようか。

そう思っていると清楚な感じの女性が僕の方へ向かってきた。髪も黒髪で、やさしい色合いのワンピースを着ている。少しわからなかったが彼女は間違いなく如月愛だった。以前のギャルっぽさはどうしたんだろう。

「早く着きすぎたと思ったんだけどあなたのほうが上手だったわね」

「雰囲気が変わるね。どうしたの？」

「似合わないかな？」

「いや、僕はそっちのほうがいいかな」

「よかった」

一時十二分。

「私、早くあなたに会いたくて」

僕は今世界中の男からうらやまれる高校生ではないか、こんなことがあっていいのだろうか。僕に会うために、会いたいがために待ち合わせ時間の五十分前に来てくれる女性がいる。

「僕も君に会いたかった、この一週間君のことしか考えてなかった」

少しかっこつけすぎたと思ったが、彼女は微笑んで

「じゃあ相思相愛だね、嬉しい」と僕の耳元で囁いた。

僕はなぜかすごい不安に思えてきた。

こんな風で良いのだろうか。

僕はずっと退屈な生活を送ってきた。ドラマや小説のような理想の世界に憧れてはいたものの現実の世の中を知ることによってそのことをあきらめざるをえなかった。もちろん意識してあきらめたわけではなく。そんな日々を過ごすうちに世の中はこんなもんだと高校生にして少々悲観してみていたのだと思う。でもそれはそれでリアルであり、少々の不自由を感じても それでやってきた。でも今の状況はどうだろう。

彼女といると、彼女のことを考えると自分の中の満たされたい部分すべてが潤っていく。不足は何もない、不満も何もない、少し何かあったとしても簡単に乗り越えられるし、蹴飛ばせる。

僕はここ数日で全く別人になってしまったようだ。

人に恋するというのは、人から愛されているという実感は人を変えるのだ。

いいんだよな、これで。

たぶん。

こんなふうになんとかよく考えるのだった隣で並んで歩く彼女の横顔を見れば知らぬ間に消えているのだ。

彼女のすべてに見とれ続けていた僕はすでに映画館についているのを彼女の声で気づかされた。

「あっちようどいい時間。早く券買いに行こ、あとジュースとポップコーン」

「オ、オッケー」

そういえば何の映画みるのか聞いてなかったな、いや聞いてたかさつきここまで歩いてくるときにずっと彼女の顔見てたから、話には注意してなかった。今度からは彼女の言葉を一字一句聞き漏らさず聞こう。そんな自分でもバカだなと思うことを考えながら、電光掲示を見た。

そうそう「シトラスミント」ってタイトルだ。コマーシャルで何度か見たな、たぶん青春もので、どんな感じだったかな？

「学生証だつてさ」

「え？ああ」

お金のない学生にとって学割は重要だからな。

「ねえ、どうしたの？ずっとぼうつとして」

「あ、いや」

「さつきからなんか変」

「いや、その、嬉しすぎて」

「もう」

彼女は少し赤くなつて僕を押した。

僕はもうどうなつてもいい。

こんなに食べるのかと思うくらいが一番大きなサイズのポップコーンを抱え、ジュースを持ち、座席を目指す。

「ここか、ちょうど見やすい位置だね」

少し彼女と話しているとすぐに暗くなり始めた。

「ホントにちょうどだったね」

「お客さんいっぱいだね、やっぱりこの映画人気なんだ」

彼女は本編前の予告編も真剣に見ていた。彼女は映画が好きなのだろうか。僕はあまり映画を見ない、それこそデートコースの一部くらいに思っていたから。たぶん僕は映画が始まって内容に集中できないだろうな。

いや、でもちゃんと見て、あとで彼女とこの映画について話すことが出来る。映画について話す如月愛を想像するとかなりほえましくて、まだ本編も始まっていないのに僕は有頂天になっていた。しかし、本編が始まると彼女だけでなく僕もじっと見入ってしまった。僕らより少し上の大学生の話であるがなんだか切ない雰囲気。がその世界を彩っていて、危うく泣いてしまうのではないかと思つた。

『ごめん、ずっと言えなかった。マジだったから勇気が出なかった』

『何？急に改まって』

『好きだ、それだけ言いたかったのに言えなかった』

『私、知ってたよ。ずっと前から』

『え？』

『だからずっと待ってやろうって思った。私にその言葉を言ってくれるまで』

『待つって』

『そうよ、もし大ちゃんが私じゃない誰かと付き合っただとしても結婚したとしても』

『絵里？』

『私もずっと好きだった、大ちゃんのことずっと好きだった』

結局僕は泣いてしまった。

僕が以前の心理状態ならこんなことはないのかもしれない。大ちゃんと絵里のありきたりな恋物語に感動したりはしないかもしれない。それだけ僕の心は浄化されているのだ。

横を見た。彼女も泣いていた。僕の上着に彼女の手が触れた。上着越しに彼女の手の感触が伝わった。僕の心臓が高鳴った。どこかでここはチャンスだと思っていたのかもしれない。彼女のほうを見ると彼女のほうも僕を見つめてきた。今度は彼女が僕の手を握った。僕の上着に触れたのはその合図だったのかもしれない。

僕はぎゅっと強く優しく手を握った。

本編が終わりエンドロールが流れ始めても出て行く客はあまりいなかった。涙をすすめる音が館内に響き、エンディングテーマに重なった。映画が終了してホールから出るときも僕と彼女の手は繋がれたままだった。

そして夕日に染まる街を二人で歩いて、彼女の門限の時間になって別れた。

彼女との距離がまた縮まった気がした。

第四章

月曜日の朝は今までもつとも憂鬱な時間であった。時間の縛りのない休日から何かに引つ張られるように現実に戻される。逃げても逃げて捕まえてくるそれから逃れることを断念し、諦めにも近い感じでこの時間を迎えていたのだが、今は前日の彼女との時間が余韻となりクッションとなりその憂鬱をやわらげてくれる。

「もう起きたの？どうしたの？」

母が困惑顔できいてくる。

失礼だな、その言い方は。と思いながらも

「よくわからないけど早く目が覚めた」と答えた。

「そう、珍しいこともあるものね」

やはり僕が早く起きることは異常である。しかしその以上の原因を思うと顔の筋肉が緩んでくるのだ。

幸せで少しおかしくなったかもしれない僕はいつもより三本早い電車を待つ。自分の乗る電車が遅すぎて他の学生を見ないということとはあったが、今日のパターンは初めてだ。

生まれて初めてだ。

電車に乗り、開いたドアと逆のドアにもたれて朝の景色を見る。

とても清々しい。僕は別に早く学校に行く必要は無いのだ。朝早く起きたとしてもそのまま家でいつもの時間までゆっくりしていればいい。しかし僕には理由があった、理由といっても全然重要ではないのだけれど。

優を驚かすのだ。

優は話によればいつもクラスで一番に学校に着いているらしい。正確に何時についているかは知らない。調べれば良いと言われればそうだが、そんなにこんなイタズラに凝りたくない。とりあえずいつもより三本早けりゃ優より先に着けるだろうと思い、この電車に乗っている。

電車が駅に着き、降りる。

時計を見てその速さに驚く。

ちよつと待てよ、これで優がもし来なかったらかなり退屈なことになるぞと少し不安になった。

しかし教室に着いた途端その心配は跡形もなく消えた。

こつちが待つどころかもう優は着いていた。

早いつて言つてもこんなに早かつたんだ。

優は携帯電話を見ていて廊下に僕がいることに気づいていない。後ろから近づいて驚かしてやろうと思った。

誰かとメールしているのか、それとも何かのサイトを見ているのか、まさか待受画面をじつと見つめているわけではあるまい。そう思うくらい優は画面に集中していた。

これはたぶん気づかないだろう。

僕はそつと優に近づいていく。

できるだけ足音を立てないように、ゆっくりゆっくり。

ちらつと携帯の画面が見えた。きつとメール画面だろう、

『マリ』、『OK』という文字が見えた。

マリ？

僕は優の肩を叩いた。

「おはよう」

「うわっ」

優は持つていた携帯を落としそうになりながら、あたふたしていた。優は携帯の画面を一度見て、僕を見返して、

「見た？」ときいてきたので

「いや、ちらつとだけ。大丈夫、マリつて名前は見えてないから」

「見えてんじゃない」

僕はおどけてそう言ったが優はかなり焦っていた。しかしひとつため息をついて

「まあ、見たんなら仕方ないけど」

「誰だ？マリってのは？」

「それは教えない」

「なんだ、つまんねえな」

優は絶対に言わないぞといわんばかりのオーラを出していた。

「わかった、わかった、俺も男だからそんなにしつこくは聞かないよ」

「よし、それでいい」

結局僕はマリの詳細を優からきくことはできなかった。まあいいさ、誰にだって秘密はある。僕にも如月愛という秘密があるんだから。

朝の教室でそんなことがあって、始業のベルが鳴って、一日が始まって、いつもどおり授業が進められ、担任の長い話を聞かされ、いつものように門の前で優と別れ、駅まで歩き、駅で電車を待つ。

いつもと同じように少し違うのだ、ポケットの中で携帯が振動し、愛する人からのメールが届く。

『今度はどこでデートしようか』

どこだっていい。

君さえいればいい。

君の笑顔があるだけで僕はいい。

それだけでいいのだから。

帰りの電車に乗り込むと久しぶりに空席を見つけた。僕は空席があれば迷わず座ることになっている。毎日電車で立っているからこそ電車で座ることが出来るというのは嬉しく感じるのだ。しかしこの夕方の時刻、程よい温かさと電車のゆれ、睡魔に勝てる自信はない。

「中学も一緒になったね」

「当たり前だ。校区が一緒なんだから」

「それもそっか」

中学の入学式で当たり前のように言葉を交わす僕と圭。

「全然、中学生になった感じがしないよ、勉強とか難しくなるのかな」

「圭なら大丈夫だよ、がんばりやだから」

「そりゃそうよ、私は大丈夫よ。心配なのは」

「僕？」

「そう、小学校のときみたいにいちいち勉強を教えないといけなくなる」と今から心配で」

「大きなお世話だよ。中学からは定期テストがあるらしいけど絶対に負けないよ」

「心配しなくても教えてあげるよ、算数とか、あ、中学からは数学だね」

「全然人の話聞いてないんだな、見てろよ、絶対に勝ってやるからな」

「はいはい、楽しみにしておくよ」

入学式に桜というのは切っても切り離せないもののようで僕の中
学にもたくさん植わっていた。風が少し強かった入学式当日、新入
生を歓迎するように花びらが舞って僕はその景色をずっと見ていた
かったがあわただしい進行の中そんな暇はなかった。

「中学になったけど、またよろしくな」

「うん、よろしくね」

「じゃあ行くわ、クラスで集まるみたいだし」

「そうだね、私も行かなくちゃ」

僕のクラスには小学校時代の友人はいなかった。何人か見知った
顔はあるものの僕は少しかかりした。でもだからこそ新しい友人
を作るチャンスでもあった。教室に入って僕は少し不安だった。出

席番号で僕の名前は真ん中くらいになることが多い。だから座席の位置も真ん中の列の三番目でクラスを中心に位置とっていた。知らない顔ばかりでつまらないなと思っていると僕の前に座っていた生徒が僕を振り向きこう言った。

「よろしく、名前は？」

あまりに突然で、しかもあまりに簡略化された台詞に一瞬戸惑い、座ったまま一步後ろにひいてしまった。僕はすぐに体制を整え、笑顔で名前を言い、今度は逆に

「君の名前は？どこの小学校？」

そう聞き返した。彼とこんなに仲良くなるとはこのときは思っていなかった。優と初めて言葉を交わした瞬間だった。

「一緒に帰る」

ある日、優が僕にそう言った。

「いいよ、でもいつも小学校のときの友達と帰ってるんだ。その子も一緒にいいかな？」

少し遠慮しながら僕が言うと

「全然かまわないよ、人数多いほうが楽しいし」

「僕の幼馴染の圭、こっちは僕のクラスメートの優」

僕は帰り道お互いを紹介した。

「よろしくね、優君」

「こちらこそ、圭ちゃん」

中学校の生活が始まった頃はいつも三人で下校していた。クラスであったことを話し合ったり、好きな歌手について話したり、ただふざけあったり、帰り道がいつも楽しかった。毎日三人で帰っていたが優はいつも途中の道で別れた。優は僕や圭より少し家が遠く方

向も違つたし、最寄り駅もひとつ違つくらいだった。

少したったある日、圭と一緒に変えるのをやめると言い出した。僕は少し残念だと思いながらも仕方ないと感じていた。同じクラスの友達と帰りたいらしい。女同士で話しながら帰りたいのだという。それから別々の帰り道になった。圭とはそこから一気に疎遠になったような気がする。話さないわけではなく、お互い避けているわけでもなく、それぞれ友人を見つけ、中学生を送っていく。それはごく自然のことであつた。圭と前みたいに話したのはいつだったか何度かあつた気がする。いつだったのだろうか。

電車の扉の開く音がする。その音で目覚めた。すっかり眠つてしまつていたらしい。振り返つてどこの駅かを見た。僕の降りる駅をひとつ過ぎていた。

しまった、寝過ぎた。

急いで電車から降りた。

階段を上がつて反対ホームに行かなければならない。

携帯電話を見るとメールが一件受信されていた。

『今度は買い物デートつてことで、それでいいかな?』

メールを見て完全に夢から覚めた。急いで返信する。

また五十嵐圭の夢を見てしまった。

夢についてこんな話を聞いたことがある。夢とは記憶の整理だという説だ。過去をすべて脳に記憶させようとすると脳がパンクしてしまう。そうならないために必要な記憶と不必要な記憶の選別を眠っている間に行っているらしい。その選別作業にかけられている過去の映像が夢であるという説。

もう一方で夢とは人の無意識を映すものだとも言われる。自分の中で意識は全くしていないが、無意識に強く思っているために同じ無意識状態である睡眠中にその映像が夢として流されているという説。

僕は忘れようとしているのか、それともどこかで強く思っているのか。

反対ホームに着くと次の電車のアナウンスがされる。ちょうどよかった、あまり待たなくてよさそうだ。日はすっかり沈んでしまっていた。頭の中ではさっきの夢がまだぐるぐる回っていた。

僕は忘れようとしているのか、それともどこかで強く思っているのか。

第五章

もう待ち合わせに早く着きすぎることはない。僕の心にもある種の余裕が生まれてきたのだろうか。毎週会っていればそうなくても仕方ないか。待ち合わせは前と同じ、僕が苦手な都会の駅。都会とっている時点で田舎者をさらしているようなものだが、やはりこの空気にはなれない。人はいつものようにありの大群のようになってまるで僕を襲おうとしているのではないかと思うほどじやうじやしている。

僕はふと時計に目を落とした。

待ち合わせ時間を過ぎている。

あれ？と思ったその瞬間にメールが来た。

『少し遅れそう。ごめんね』

ごめんねのあとにハートがついているから許す。僕はこれからも女性に簡単にだまされることだろう。

仕方なく待つ。

自販機があつたので缶コーヒーを買った。この苦さと甘さが少々暇つぶしになるだろう。飲みながらあのときの、はじめて如月愛に出会ったときもファーストフードの店でコーヒーを飲んでたな。とかそんなことを思い出していた。缶コーヒーを飲み干し、五分くらいしてから僕の待つべき人がやってきた。

「待った？」

「少しね」

「ごめんね、ねぐせが直らなくて」

「気にしないでいいよ」

そういいながらねぐせの彼女を想像して、一度見てみたいと思った。心から思った。

「あ、そうだ。買い物って何か欲しいものがあるの？」

「リング」

「リング？」

「怖いじゃないよ、ペアリング」

「あ、ああ。指輪ね」

「恋人同士なんだから。私はパールックでもいいかなって思ったけど」

「それはちよつとやりすぎじゃない」

「冗談よ、冗談」

そんな話をしながら都会の街をいく。背の高いビルが僕らを見下ろしているような錯覚に襲われる。さつきからやたらとスーツ姿のサラリーマンと行き違うがこんなところずっと仕事をしている神経が僕にはわからない。

「こつちこつち」

まるで僕らと違う都会の空気に打ちのめされそうになるのを彼女の声が止めた。

百貨店か？

こんな建物を何と言うのだろう。

商業ビル？いや、ちがうな。

「ここでリング見てみない？」

その建物から放たれる「おしゃれ」という強いオーラに僕は場違いではないかと思うがとりあえずカッコはつけてきたからギリギリ大丈夫だろう。

それにしてもこの前の映画のときもそうだが、やけに彼女はこういった都会の空気に慣れている気がする。僕と同じ中学だったんだよね？高校生になるとみな流行を求め都市部に集まってくるのだろう。女の子は特に。でも男だって来てるか。僕がそういうのに疎い

ただだ。こんなどうでもいい考え事はやめにして手招きする彼女のほうに早く行こう。

「ぼーっとしすぎだよ」

「はい」

建物の中に入るときらきらといたるところが光っていた。それは田舎ものの僕にはそう見えるという比喻ではなく、金属のきらめきだった。いわゆるアクセサリショップだ。とはいえセレブが集うような宝石店ではない。そう、僕らの世代にも買うことが出来るリーズナブルな店だった。しかしいくらリーズナブルとはいえ、財布が年中寂しい僕にとっては結構な額だった。

「えーっと、リング、リングっと」

圧倒されていた僕を尻目に彼女は店内を歩き回っていく。せっかくなので僕も見ることにする。

「あら、可愛いカップルね」

店の店員か、いや、店長か。他のスタッフに比べ少し年上のようにだ。僕らを見て微笑みながら声をかけてきた。

「何をおさがしですか？」

「あの、リングを。おそろいのリングが欲しくて」

「リングならこちらになります」

二人は足早に売り場のほうへ進み、僕は遅れないようについていくのがやっとだった。

「こちらです。どうぞ」

「ありがとうございます」

そして彼女は真剣にそのウィンドウに目を凝らし始めた。僕も見
るフリをするが、どれがいいのかわからず、ただ選ぶフリをしてい
た。彼女が気に入ったものをすれば良い。僕にアクセサリーへのこ
だわりはない。

「ダメだわ、いいのがない」

「え？こんなに種類があるのに？」

「うん、なんかしつくりこない」

「しつくりって……」

「他の店回ろう」

「うん、別にかまわないけど」

いったい何に気が入らなかったのかはわからないが、彼女がそう
いうので次の店に行くことにした。

二件目。

「うーん、いまいち」

三件目。

「ここもダメ」

四件目。

「惜しいけど、違うな」

結局、何件も回ったが、僕と彼女はリングを買わなかった。くた
びれた僕が彼女を喫茶店に誘い、店内に入ってコーヒー一杯の値段
の高さに驚き、注文を待つ間に彼女に聞いてみた。

「いったい、何がダメなの？僕から見れば結構いいのもあったと思
うけど」

「うーん、なんていうか、フィーリングがね」

なんか前にもこんなことを聞いた覚えがある。

コーヒーが運ばれてきて、二人ほぼ同時に口をつけた。

「フイーリングねえ」

「私ね、やっぱりリングって大切だと思うんだ。二人が恋人である証って言うか、それを持ってるといつでも相手のことを思えるでしよう」

「うん」

「だからやっぱり妥協したくないって言うか、うん」

少し変わった性格と言うのだろうか、こだわりが強いと言うのか。でもそんなところが僕は好きだ。

「君がそういうなら仕方がない、もう少し回るか」

「うん……あ、ちょっと待って、もう時間」

「時間？ああ、門限か」

「ごめんね」

「仕方ないよ、でも前から思ってたけど今時、門限って珍しいね」

「そうかな？まあ、うちは結構親が厳しいから」

「うん、じゃあ今日はここでお別れだ。駅までいこっか」

「きょうはありがとう」

「また来週見てみようか」

「うん」

夕方になり、来たときよりも数段人の数が多くなっている中をはぐれないように手をつないで歩いていく。今まで恋人とは言ってもなんだか僕と違う世界の言葉のようで少し恥ずかしくもあったが、もうずいぶんなれた。こうやって自然に手を引くことが出来るし、誰が見ても僕と彼女はお似合いのカップルだろう。誰も疑いやしな

い。

駅について電車が来るまで彼女と話をし、手を振って別れた。もう彼女の格好の違和感も特に感じなかったし、如月愛は如月愛以外の何者でもないことが今日のリング探してわかった。

彼女を乗せた電車が行き去った。

僕は毎週彼女に会い、そのことに満足している。

恋人同士なんだよな、僕は。

そう思ったときにふと気づいてしまった。恋人同士だったら普通するべきものが欠けてはいないだろうか。彼女は生粋のプラトニックなのか。それとも僕から来るのを待っているのだろうか。

本当にカップルなんだよな。

僕と彼女は付き合っているんだよな。

まだこの季節の日は長いが、それでもずいぶん薄暗くなってきた。そして僕の心に一種の不安が生じていた。この不安がどこから来るものなのかわからない。

バカ、何を考えているんだ。そんなに気になるんだったら今からメールでも電話でもして彼女の気持ちを聞けばいいじゃないか。

いや、また来週にも会うじゃないか。

そのときでいい。

何を焦っているんだ。

今日も恋人の証であるリングを買いにいったんだろう。

僕と彼女は恋人同士なんだ。

沈んでいく太陽が僕の心に重なるようで頭の中からその悪いほう

の考えを無理やりに消した。

第六章

漠然とした不安が僕の中で消えたり現れたりして、僕の不安定な一週間がはじまった。とはいえ実際そんなのんきなことは言ってもらえず、高校の期末テストまで一週間を切っている。僕はもちろん一夜漬け型であるのだが、何かしないと落ち着かなかった。優でも誘って遊びに行こうかとも考えたが、

「今度のテスト勝負って言ったろ？数学、物理、生物をこの一週間でパワーアップするから今は無理だ。そのかわりテスト終わったらかなり遊べるぞ。おまえのおごりで」

それは前に約束した賭けのことを言っているのだろうか。賭けはいいが優は得意教科のパワーアップよりも苦手教科の補強をしたほうが将来のためだと思うが。そういうわけで仕方なく僕も久しぶりに、いや、おそらくはじめて一週間前に自室の机で教科書を開いているのだ。とりあえず打倒優にむけて比較的苦手な理数系強化の勉強を始めた。

やめた。

無理なことはやるもんじゃない。まだ開始十分も経っていないがどうしても集中できなかった。やはり心に引っかかりを感じる。机の上の携帯を手取る。今から彼女の本当の気持ちメールで確かめよう。しかし開いた携帯をすぐに閉じた。なんとなくメールすることができなかった。今週も会うからいいか。いや、テストは来週の月曜日だ。次の日曜日はやはり断ったほうがいいだろうか。テスト一日前はさすがに。こんな大事なときにテストが重なるなんてついてないな。

ついてないな、ホントについてないな。

いや、彼女はどうせ門限があるからデートが終わってから勉強す

れば間に合うんじゃないか。

そうだ、そうしよう。

テストのためにこんな大切な日を飛ばすわけには行かない。今日は水曜日、僕は教科書をその辺に放ってただのんびり過ごすことにした。教科書の代わりに読みかけだったマンガを手に取った。

最近夜がとてもし暑くなった。我が家の決まりではクーラーの使用は家族が集まる居間に限られている。もちろん電気代節約のためであるが、特例として毎年期末テスト前になるとあくまで「テスト勉強のため」ということで自室のクーラー使用が許される。だからもちろん今はとても涼しい。こうやってマンガも汗だくにならずに読めるのである。心にひっかかりがあってもなぜか集中できる。僕の体は僕の都合のよいように出来ているのだ。僕が思いつきりくつろいでいると、下の階から母の僕を呼ぶ声がした。びくつとしたがすぐに自室のドアを開け、階段の下の母に聞いた。

「どうしたの？」

「あなたあての封筒が届いてるわよ」

「封筒？」

急いで階段を降りていき、母からその封筒を手渡された。何か小さなものが入っている感触がある。その小さい硬い何かを封筒越しで確かめた。なんだろう？そういう思いを抱えながら今下りてきた階段をそのまま上り、部屋のドアを閉めると、すぐに封を切った。封筒を振ると中から出てきたのは指輪だった。僕は半分その意味がわかった。中に入っている便箋を取り出そうとするが、封筒と便箋の隙間がなく、取り出しにくかったが、力強く引き抜いた。やはり如月愛からだった。

『少し驚かそうと思ってこれを送りました。』

どうしてもリングが欲しかったから先に見てきちゃいました。

私の好みだけ大丈夫ですか。

大丈夫だよ。

そういうことにおきます。

私も同じのを買って、今、はめています。

これが届いたらさっそく指にはめてください。

次のデートですが私の高校でテストがあるので会えません。

ごめんね。

それじゃあ、また今度ね。

如月愛』

僕は嬉しいのと同時に一瞬でも彼女のことを不審に思った自分がバカに思えた。

ちゃんと彼女は僕のことを考えていてくれる。

僕はその指輪を指にはめた。

今週会えないのは少し寂しいな。でも、そういうこともあるか。この手紙を読んでから、僕は内心ほっとしていた。心に余裕が出来たから、おそらくテスト勉強はいつもの一夜漬け型にシフトするだろう。とりあえず、お礼のメールを彼女に送った。すっかり緊張感が解けてしまった僕はもちろん勉強はせず、マンガに手を伸ばそうとしたがさっきの時間で読み終えてしまったのを思い出し、仕方なく今度はテレビのリモコンを取った。

「え・・・・・・・・」

僕を構成している全てが180度ひっくり返るような衝撃を受けた。

いつものように険しい表情で世知辛い世の中を伝えるキャスター。画面がスタジオからVTRに切り替わり、ある殺人事件の内容が暗いナレーションとともに説明される。残虐な犯行。殺害されてもう数週間たったまま放置されていたらしい。また画面がスタジオに戻り、元警察関係者というコメンテーターがこの事件についての仮説を提示する。

コメント内容なんて全く聞こえてこなかった。

被害者の名前が読み上げられ、僕は凍りついた。

『五十嵐圭』

第七章

刑事が来たのはニユースを見た二日後だった。

僕は一昨日のニユースを見たあとから脱け殻のようにギリギリの日々を過ごしていた。そんな僕を家族はもちろん心配してくれていたが、僕がしおれた声で少し一人にしてほしいと言うと何も言わずにうなずいた。家族だってつらいのは僕にもわかる。特に母は圭のことをよく知っている。僕が小学生だった頃なんて僕と同じように毎日顔を合わせていたのだから。

本当は僕が母に何か声をかけてやらねばならないのに。

でも僕にそんな心の余裕はなかった。

このことについて自分の中で整理しなければならぬのだろうが、もはやそんな余裕はなかった。だからほとんど何も考えず食事もなくにとらずに過ごした。

ただ圭は僕に助けを求めているんじゃないかとよく思う。

だから何度も圭の夢を見たんだと理解し、さらに救えなかった自分に罪を感じる。冷静な脳をもっていたならこんなオカルトめいたことも思わなかったかもしれない。ただ今は気持ち悪く波打つ心が僕の脳を圧倒しているのだろう。意味もなく自分をせめてまた吐きそうになる。

警察が家にきたことはかすかに聞こえる下の階の様子からわかった。母は僕が今精神的に弱っていて話をするのには無理があると刑事に説明し、刑事はすぐに済みますからと言いつ方は丁寧であるが引き下がるわけには行かないという執着が感じられた。

「頼みますよ、重要なことなんです」

「今日のところはおひきとりください」

こんなふうな会話が続く中で僕は部屋の戸を空け、階段を降り、母と刑事のやりとりに割って入った。

「僕に何のようでしょう？」

母は大丈夫なの？と心配したが、僕は年配と若手のふたりの刑事への言葉で返した。

「僕と話すためにこれから毎日刑事さんに来られても困りますから」
そう僕は少し強めに言った。刑事に嫌な顔をされと思うたが実際はその逆でうれしそうであった。僕はなにか不自然で気分は良くなかった。

「それで僕に何か？」

「その前に外へ出ないか？お母さんには悪いが君だけと話したい」
年配の刑事がやさしい口調で言った。

「僕は別にかまいませんが」

「それじゃあ私たちは外で待つてるから用意ができたら来てくれ」
刑事はそう言って玄関の戸を閉めた。

僕はそのまま出ていこうとしたがボサボサの髪に寝巻を着たままであったことに気付き、すぐ部屋に取りに行った。

やはりここ数日、大げさに言えば人間らしく生きることを忘れていたのかもしれない。身なりのことなんて頭になかった。自分がどんな格好をしているのかどんな表情しているかなんて日頃の当たり前が皆無の状態になっている。それほどに僕はギリギリであった。

「少し先のファミレスでも行こうか。何か食べたいのならおごつてやるよ」

申し訳程度に着替えた僕が外へ出るとやさしい口調で年配の刑事が答えた。僕は特に返事をしなかった。しかし刑事は一方的に僕に話し掛けた。リラックスさせようとしているのか？よくわからないが僕が少し警戒しているように見えているのかも知れない。実際、警戒はしているのだが。

「最近の男は結婚してなくても指輪をするのかい？」

「え？」

僕は刑事が何を言っているのかわからなかった。

「なあ」と年配が若手を振りかえって言う

「結婚してなくなつて指輪くらいしますよ。今じゃファッションで

指輪をしている男もいるんじゃないですか」

はじめて若いほうの声をきいた。

指輪。

リング。

ふと如月愛の顔が頭をよぎった。今の今まで忘れていた。あんなに夢中だったのに。無理もない、こんなことがあつて平静でいられるものか。

久しぶりに外の空気を吸った。たった二日間部屋に閉じこもっていただけなのに妙に懐かしい。もちろん学校にも行っていない、家族以外の人と会うのも久しぶりだ。

近くのファミレスに着いた。中に入ると飛びっきりの笑顔の店員の向こうに時計が見えた。

二時。

僕の中に時間というものが存在していなかった。これまた久しぶりに時の感覚を思い出した。

窓側の一番奥の席に案内された。店員には僕らがどのように見えているだろう。父と長男、次男というところか、いや、そんなことどうでもいい。

僕と向き合うように二人の刑事が座ってオープンな取調室のように錯覚した。いったい何を話すのだろう。

なるべく刑事と目は合わさないようにしていると若手のほうが手をあげて店員を呼んだ。年配のほうが僕に聞く。

「何か食べるかい？」

「いえ」

僕は答える。

「じゃあアイスコーヒーでいいかな？」

「はい」

僕はまた感情をいれずに答える。

若いほうが店員にアイスコーヒー三つと注文する。アイスコーヒーは驚くほど早く目の前にやってきた。年配のほうが一口飲むと僕

のほうをじつと見つめた。

「悪いね、つき合わせてしまつて。これがわたしの仕事なもんでね」
「いえ。それで僕に話とは？」

「わかつているだろうとは思うが五十嵐圭さんの事件のことだね」

「それはもちろんわかつてます」

「彼女とは古い付き合いなのかね」

「いったいこの刑事は何が言いたいんだろう。もうかなり前から僕が何かしら疑われていると感じていた。しかし何を根拠に僕を疑うのだろう。」

「小学校のときからの幼馴染でした。でも今はほとんど関わりはありませんでした」

「若い方が手帳に何かを書いている。」

「それは本当だね？」

年配のその台詞は「ウソだろ？」に聞こえて腹が立った。

「あの」

「なんだい？」

「言いたいことがあるならはっきりと言ってください。僕のことを疑っているんでしょう」

僕は多少語気を荒げた。

「すまん、悪かった、ちょっと回りくどかったな。刑事のクセでね」

「・・・・・・」

僕は気分が悪かった。

「実は君と彼女が会っているところを見たという目撃情報があつてね」

「え？」

実際のところ僕は高校生になってから一度も圭に会っていない。

「そんなはずはありません。いつのことですか？」

「おい読んでくれ」

年配の刑事が若手に指示をした。若手は手帳の違うページを開くと「ファーストフード店の店員の証言によると三週間前の日曜日、君

とある女性が話しているのを目撃している。その店員に五十嵐圭の最近の写真を見せたところ、君と会ったのはこの人物に間違いないと証言している。また他の情報から五十嵐圭は一ヶ月ほど前にこの辺りへ戻っていることがわかつている。」

「ちよつと待つてください。僕は本当に会っていない」

「それは本当かい？よく思い出してみてくれないか」

また刑事は優しい口調に戻った。だが明らかに僕のことを疑っている。三週間前の日曜日、僕は何をしていただろう。

あつ。

「思い出しました。僕は確かに女性とファーストフード店にいました。でも圭ではない」

「ほう、じゃあ誰といたのかね」

年配の刑事は身を乗り出して僕に聞いてきた。若い方は手帳にメモを取る準備をしている。

「如月愛という女性です」

「如月愛？」

年配の刑事はテーブルの上の僕の手を少し見ってから言った。

「なるほど。その指輪の？」

若い方がメモを取る。僕は力強く言った。

「はい、僕は彼女と一緒に店にいたんです」

「じゃあ今から連絡とってもらえるかな？その彼女に」

「いいですけど、今携帯がなくて」

「この店のを借りればいいじゃないか」

「いや、その……」

若い方が口を開いた。

「君は彼女の番号を覚えていないんだろ？いつも携帯のメモリから電話をかけるから」

「……はい」

「彼女の携帯番号くらい覚えとけよ」

「……はい」

その通りだった。番号まで覚えていなかった。年配のほうが息をひとつ吐き、言った。

「それじゃあ仕方ない。家に戻ってかけてくれるかな？」

「はい」

とりあえずこれで僕にかかった疑いは晴れる。しかしなぜ僕が疑われているのだろうか。同時に圭を殺したものに対する憎しみが沸々とわいてきた。僕はファミレスから帰る途中に刑事に話をした。

「刑事さん、圭の写真見せてもらえないですか？最近の写真なんですよね」

「ああ、でもどうして？」

「圭とは幼馴染なんですけど最近は今全く会っていないくて。いや、中学の頃あったのが最後なんです。だから……」

僕は少し涙ぐんでしまった。圭にせめてもう一度会いたかった。

刑事はポケットを探った。一枚の写真が僕に手渡された。

僕は言葉を失った。

「おいおい、顔が真っ青だぞ。写真を見たって悲しさが増えるだけだ」

違う。

違う。

そうじゃない。

茶髪、ジーンズ、Ｔシャツ、サングラス。

「刑事さん、この写真、本当に圭ですか？」

僕は少し興奮気味に尋ねた。

「本当だよ。うそついてどうすんだ。殺される直前の写真だそうだ。実際その格好で遺体も発見された」

僕は混乱していた。

写真を見て悲しさがこみ上げてきたから？

いや、違う。

写真の圭が僕の思い出と違うから？

それも違う。

僕は混乱していた。偶然なのか？できれば偶然であってほしい。

……同じなんだ。

何もかも同じなんだ。

あの日の如月愛と全く同じ格好なんだよ。

この写真の中の五十嵐圭は。

体が急に重くなった。顔色も悪いらしい。刑事が心配そうに僕を見ている。

「あの今日はもういいですか」

僕は写真を刑事に押し付けた。

「だが君の彼女に連絡してもらわないことには」

「明日また来てください。今日の夜にでも連絡をしておきます」

二人の刑事は困ったようであつた。

「どうしますか？」

若い方が年配に尋ねた。年配は写真をポケットに戻し、こう言つた。

「今日はこのあたりにしておこうか、君の顔色が悪すぎる。人の健康を害してまで捜査をするつもりはない。ただし、明日また来るから必ず連絡はしておいてくれ。我々も仕事をしないわけにはいかないんでね」

僕は二人の刑事に一礼をした。

家に帰る間、頭は混乱したままであつた。ただ体中にいやな予感が染み渡っていくような感覚があつた。

家に着くと母にいくつか聞かれたが適当に話を切り上げ、また自室にこもつた。

如月愛に電話をしてみるが、出なかつた。

仕方なく、メールを送つた。

『とりあえず連絡して。至急頼む』

僕はうすうす勘付いていた。
そして僕の勘は当たった。

メールは返ってこなかった。

第八章

僕はあの時なぜ圭に好きだと言えなかったのか。
理由なんてわからない。

*

「なんだよ、話って」

僕は中学最後の夏休み直前に圭に呼び出された。セミがうるさく鳴いていて僕のこのけだるい声もかき消されそうなほどだった。

終業式で校長の退屈な話を聞いて、教室に戻りまた担任の夏休みの過ごし方を汗だくになりながら聞いて、やっと夏休みスタートだっというときに僕の教室の前で圭が待っていた。

圭とは結局中学三年間で同じクラスになったことは一度もなかった。一緒に帰るのをやめてからは疎遠というよりはほとんど他人に近くなっていた。

この日優は学校を休んでいた。夏風邪だと言っていたがそれは怪しい。おそらく家族旅行にでも出かけていたのだろう。クラスに一人や二人は大型の休みの前後に延長のような形で休みを取る。学校の先生も何も言わない。そんなもんだらう。実際あとから優に聞いてみると海外旅行を満喫したとよくわからないおみやげを僕にくれた。

「ちよつといいかな」

教室から出ると圭にそういわれた。

「うん、いいけど」

なぜ呼び出されたのかはわからなかったが僕は圭と話すのが久しぶりで嬉しかった。ただそれを悟られないようにわざとけだるそうに答えた。

空になった僕のクラスに入った。さっきまで人がいっぱいだった

教室は熱気で満たされていて窓は開いていたがじっとしていても汗が滴る。

「なんだよ、話って」

「うん……それより、こうやって話すの久しぶりだよね」

「うん、まあ」

「ずっと会ってなかったから忘れられたのかって思ってたよ」

「そんなわけないだろ」

僕はずっとけだるさを演じていたがこのセリフは心の奥から自然に出てきた。

「よかった……で、ね」

圭はやつと本題に入ろうとしていた。

「うん」

僕は少し悲しげな表情の圭が何を話すのか内心ドキドキしていた。

「私ね、高校は別のところへ行くんだ」

「うん」

別のところと言われてもはっきり言って意味がわからなかった。

それは当たり前ではないかという思いもあった。圭は成績優秀であるから僕とは別に決まっている。偏差値という数字が僕と圭が別であることを証明している。

「圭ならいいところにいけるだろう、私立か？」

「ううん、別ってそういう意味じゃなくてね。遠くに行くんだ」

「……そうなんだ」

僕はやつと圭が言おうとしていることがわかった。離れ離れになるのだということを圭は伝えたかったのだ。

圭から行く先を聞いて僕は沈黙してしまった。空気が重いことに気がつき

「それは遠いな」と当たり前前の返答をした。

「……うん」

圭は僕と目を合わせなかった。

僕はどんな言葉をかければよかったのだろうか。

今でも答えはわからない。

沈黙がまた続いたがセミの声でやけにうるさかった。

*

刑事は予定通り、次の日の朝に僕の家を訪れたらしいが、僕はそのときは家を出た後だった。如月愛からのメールは来なかったが、鈴木優からのメールが来たのだ。

『明日少し話さないか』

実際僕も優と同感であつた。今この時期に一番話さなければいけない人物であつたからだ。共通の幼馴染を亡くしたのだからまず連絡を取らなければならなかった。僕同様に彼も抜け殻のような日々を送つたに違いない。

そして彼とともに僕は復讐しなければならない。

僕は優からメールを受けてから頭の中で今度の『事件』を整理してみた。

圭はおよそ三週間前に殺されて最近になって山の中で発見された。ニュースからの情報によれば圭はおよそ一ヶ月前にこつちへ戻ってきている。つまり戻ってきてすぐに殺されている。しかし圭はどうして僕に連絡しなかったのだろう。それはひっかかる。

その頃、僕は写真で見た圭と全く同じ格好をした女性から手紙をもらい、実際に会う。

ここが一番の不審点であり偶然にしてはおかしすぎる。

ひとつの仮説として僕と五十嵐圭が一緒にいたということを犯人は周囲に知らせたかつたのではないかと考えてみる。そのことで必ず僕に疑いが向く。ファーストフード店での僕と女性の会話が店員にしっかりと僕らを記憶させたのだ。

『学校に忍び込んだ』など大きな声で話したのは店員やほかの客に僕らを印象付けるためだ。

そしてその女性が次に僕とあつたときの服装はまるで違うものだ

った。それは五十嵐圭がもうこの世にはいないということだったのだ。

犯人はその女性で間違いなかった。

動機や細かいことなどは刑事でも探偵でもない僕にはわからない。でも僕は確信した。

如月愛が犯人であると。

*

「最後に三人で一緒に帰らない？」

中学の卒業式の日圭は僕にそう言った。僕と優はあいかわらず一緒に帰っていたから圭さえ良ければ断りなどいらなかった。

「いいのか、今日で最後の日なのに。友達と帰らなくて」

「友達には昨日言ったから大丈夫」

「僕はかまわないよ、優もきつと喜ぶよ」

僕は卒業式というものが退屈でならなかった。早く終わることだけを祈っていた僕に反して会場は涙で洪水が出来そうだった。女子生徒と先生は一樣に涙を流していた。男子生徒も結構泣いていたくらいだったから卒業式って泣くものなんだと冷静にそう思っていた。結局涙ひとつ流さなかったものの三年間通い続けた校舎や教室には愛着もあってなんとなく寂しい気はした。

式が終わり、教室に戻ったのはいいが先生がまた涙で語りだすものだからまた空気が湿っぽくなった。僕は別れのつらさよりもこんな自分が高校生になるんだと少し不思議な気持ちでいた。結局僕は偏差値順で言うと真ん中より少し上の高校、つまり今僕が通っている高校に進路を決めることが出来た。何の縁かはわからないが優も僕と同じ高校に進学するようだ。

そして圭は夏休みに僕に告げたとおり別の場所へ行ってしまう。

卒業式が終わりにぎやかな門を出ると圭は僕と優を待っていた。

「卒業おめでとうございます」

圭がおどけて言うと言と僕と優はわざとふかぶかと頭をさげ

「ありがとうございます」ときれいにハモった。

「結局二人はずっと一緒にいたんだね、その仲の良さにはあきれるよ」

圭が笑顔でそう言った。

「こーやってまた三人で帰れるのは嬉しいな」

優がこれ以上はないほどの笑顔で言う。

「うん、そーだな」

僕も笑顔でそう答えた。

圭のことは優もちろん知っていた。もうこーやって並んで話すこともなくなるのだろうか。圭が遠くへ行ってしまう理由は父の仕事の都合であった。圭の父は以前から転勤の話が来ており単身赴任も考えたそうだが圭も中学から高校へ上がるのを期に新しい赴任先へ家族で引越そうと考えたのだ。僕も優も「行くな」とは言えなかった。どこかにそういつてしまいたい気持ちはあっただろうが人の家庭のことまで口を出すわけにはいかない。それに中学生の友人が何かを言ったところでそれは何の効力も発揮しないのだ。

ただ離れ離れになるという現実を受け止めるしかなかった。

「私のこと忘れないでね」

圭がぼそつと言った。その声は切願するようでなく、ただ普段の会話のような感じであった。それが余計に心に響いた。

「忘れるわけないだろ、なあ」

優が強く言った。

「覚えてるよ、ずつと」

僕も圭を見て言う。

「うん、ありがと。私も一生忘れないから」

圭の目に少し光るものが見えた。

少しして優と分かれる道が見えてきた。優の家は僕と圭の家とは少し方向が違う。

優は突然僕の肩を抱き道の端に引き寄せた。

「圭ちゃん、悪い。ちょっと男の話があるから、ちょっと待ってて」
優は圭にそう言った。圭は首をかしげていた。
「なんだよ、どうした？」

僕は優に問う。

「ラストチャンスだぞ」

「何が？」

「いいか？圭ちゃんは遠くへ行っちゃうんだぞ。ずっと会えないんだぞ」

「それはわかってるよ」

「じゃあ言えよ」

「何を」

「好きってさ」

*

無垢な頃が僕の脳内で何度も再生される。

優との待ち合わせ場所に行く途中で僕はやはり後悔していた。

あの如月愛からの手紙をもらったとき五十嵐圭であればいいと思ったのはもう一度チャンスが欲しかったからだ。

もう一度会えたなら僕ははつきりと言える。

大きな声で圭に伝えることが出来る。

だけど圭はもういない。

永遠に会うことが出来ないのだ。

圭、僕は君が好きだった。

第九章

優が僕を呼び出したのは奇しくもあのファーストフード店だった。如月愛にコーヒーをおごったあの店だ。ここから始まったんだ、何もかも。

朝の十時、店の二階のテーブルで待っているとメールが来た。僕は注文を済ませ足早に階段を上がった。コーヒーではなくコーラを頼んだ。

あたりを見渡すと窓際の席に優はいた。

「優、元気だったか……そんなわけないか」

四人がけテーブルに座っている優はいつもと変わりがない気がした。日ごろから顔にでないタイプであるからそう不自然には感じなかった。ただ声のトーンは少し暗い。

「真っ先にお前に連絡するべきだったんだろうな」

そう言っただけは下を向いた。

「僕こそ、気が動転していて」

僕は優の正面に座った。

「仕方ないさ、お互い」

「うん」

それきりお互い黙ってしまった。

店内に流れる音楽がやけにむなしく感じられた。

僕は優に自分の考えを伝えようとしたがなかなか上手く切り出せなかった。目の前にいる優は果たして僕の戯言を聞けるだけの心の余裕を持っているのだろうか。そう考えると少し前まで事件の推理を試みた僕は優以上に冷静なのかもしれない。いや、冷たい、というべきだろうか。

沈黙は続いているが、やはり優も何か伝えようとして僕を呼び出したはずだ。

「何か話すことがあるんだろう？」

僕は思わず口から出た言葉の不自然さに鳥肌が立った。僕は何を言っているんだ。

窓の外を眺めていた優はこちらを少し見て

「うん」と答えたがその声は蚊の飛ぶ音のように小さかった。

そう言つてまた優はまた黙ってしまった。

「いいよ、別に無理しなくても。変なこと聞いてごめん」

「いや、いいんだ。うん、いいんだ……」

優はそう言つと隣に置いてあつたかばんを取った。

「なあ、この店出ないか」

「うん、いいけど」

僕は意味がわからなかったが、とりあえず同調した。

店を出ると空は少し曇つていた。遠い空に厚い雲が見えてなんだから気分が滅入った。

「ついてきてくれ」

優はそう言つと歩き始めた。

「どこに行くんだ？」

僕がそう言つと優は歩を進めながら答えた。

「特別な場所じゃない。その場所には何の意味もない」

優はそう答えた。「意味がわからない」と返そうと思つたがどうでも良くなった。とにかく優についていこう。それだけ思つた。

高校の方向とは全く逆であり見慣れない景色だった。優はどこに向かおうとしているのか。

駅も通り過ぎて、はじめは大きな道路に沿つた歩道を歩いていたが次第に中の道に入った。住宅街であつたが、勤めに出ているためだろうか人の気配はなかった。ただ家という箱がずらつと並んでいるようだった。

僕ら以外にいるのは電線に乗ったカラスくらいだった。

さらにその住宅街も抜け、まだ進む。時計を見るともう15分ほど歩いていた。

しばらくして優は立ち止まった。

そこには更地があった。何の目的で存在しているのかわからない
ただっ広い一画であった。この時間帯だからだろうか、やはり人
は少ない。

優は重そうに口を開いた。

「ここだ」

「え？」

僕は優の台詞の意味がわからなかった。何が「ここ」なのだろう。
「この場所には意味はないんだ。ここで起きたことに意味があった」
「優？」

「俺はこの場所で圭ちゃんに会ったんだ。会ってしまったんだ」

「・・・圭に会った？」

僕は狂ったように興奮していた。頭の中がまたパニックになって
いた。冷静に気づきあげたピラミッドが一気に崩れていく。

気がつくと僕は優の両腕を掴んでいた。

「圭に会ったのか！ いつだ、いつ会ったんだ」

優は何も答えなかった。僕は優の腕を激しく揺らしていることに
気づき、われに返った。

「ごめん」

「おまえは謝らなくていい。謝らなくていいから・・・」

ひとつ間を置いて優が再び話し始めた。

「謝るのは俺のほうなんだから」

さつきから優の台詞の意味が全くわからなかった。優は続けた。

「三週間くらい前にこの辺りを歩いていたんだ。言ってなかったけ
ど俺には彼女がいて、この辺りに住んでいた」

いつもの僕らなら「彼女」という話題だけで色めきたったが、今
はそれより先を知りたかった。

「夕方くらい、今日みたいな天気だったから空は暗かった。俺はこ
の辺りの道、もちろんこの更地の前を通った。いつも人通りがなか
ったけどその日は違った。この更地に人影があった。それも見覚え
のある人影。でもそれが誰なのかなかわからなかった。なんせ

格好が前と全く変わっていたからだった。でも少しして何となくわかった。それが圭ちゃんであると。俺は無意識にそっちへ近づいた。すると向こうも俺に気づいた。『優くん？』って言われたそのときに今までずっと抑えてきたものが爆発してしまった」

優は立ち止まった。

「俺はずっと圭ちゃんが好きだった。中学時代のことだし、もう会うこともないだろうし、そんな思いは上手く心の奥に隠されていたんだ。この思いは永遠に現れないはずだった。でも目の前にその本人がいる。本人がいたんだよ」

優の口調が興奮し始めていた。圭のことが好きだった？そんなことは聞いたこともないし、勘ぐったこともなかった。僕は全く気づかなかった。

「優、本当か？」

僕はそう言葉を発したものの優はそんな言葉聞いていなかった。

その語り口調に熱がこもっていた。僕は努めて冷静に聞こうとした。ここで何があったのかを。優の一字一句を逃さずに。

「俺は思わず圭ちゃんに言ってしまった。開かれるはずのなかったこの思いが口から矢のように出ていったよ。はじめは圭ちゃんも驚いた顔をしていたけど取り乱しもせず俺の告白を全て聞いてくれた。俺が話し終わると圭ちゃんは言っただ。『ありがとう。でも私は今片思いしてるの。今から告白しにしようと思う、そうね、今の優くんみたいに』ってな」

僕は何も言葉を発することが出来なかった。優は続ける。

「お前だよ、圭ちゃんはやっぱりお前のことが好きだったんだ。俺はそんなこと前から知ってた。見てりやわかるんだよ、悔しいけど、つらいけどわかってたんだよ。告白するって聞いた後、俺は確実に狂っていたんだ。『どうして俺じゃダメなんだよ、どうしてあいつなんだよ』って大声で怒鳴り散らして気づいたら首を絞めてたんだ」

優は涙を流しながら叫ぶように僕に言った。

「お前さえ、あの時にちゃんと圭ちゃんに告白していればこんなこ

とはならなかったんだ。俺がここで圭ちゃんと会わなければこんなことにはならなかったんだ。俺は神様を恨むよ」

僕はただ呆然としていた。何と言えいいのかわからなかった。幼馴染を殺した犯人を前に激怒しなければならぬはずだ。復讐しなければならぬはずだ。

でも体が動かない。

体全部が震えて頭の中が真っ白になった。

僕は興奮したまま続ける。

「俺は動かなくなった圭ちゃんを前にどうすることも出来なくなった。ただこわくて逃げたかったけどそんな精神力が残ってなかった。そこへ時間になっても来ない俺を心配した彼女がやってきた。彼女はもちろん驚いたよ。でも冷静だった。『私に任せて』と言って俺をなだめた。とりあえずこの死体を隠して何にもなかったことにしようと言った。そしてもし見つかったときのための偽装工作をしようと言った。その偽装工作というのが俺以外の誰かに罪を着せるということだった」

僕は優の言葉をただの記号のように聞いていた。言葉の意味などもういらない。音のない広場に優の声だけが響いている。

「俺の彼女はある人物を犯人に仕立て上げようとした。圭ちゃんと同じ格好をしてその人物に会い、圭ちゃんがまだ生きているように思わせる。タイミングを見計らってその人物の上着のポケットに死体の髪の毛を入れる。圭ちゃんがしていた指輪をペアリングとして送る。物的証拠をさりげなくその人物へ流していく、如月愛という架空の人物として」

僕の脳がやっと反応してきた。すべてがここで明かされた。

僕はどうすればいい？

一番大事な幼馴染を殺した無二の親友にどう接すればいい？

もうこんな芝居はやめにしてあの頃に戻らないか？

しかしこれは紛れもない現実で悲しいけど真実なんだ。

僕はめまいがした。

「これで最後だ」

優は僕に銃口を向けていた。これは本当に現実なのか。

「お前は幼馴染を殺してしまった罪悪感から自ら死を選ぶ。警察はそう判断する。これですべて終わる」

カチリという物騒な音がしてその黒い先は僕を的確に捉えている。僕はやはり動けない。逃げなくちゃいけない。殺されてしまう。でもシヨックが大きすぎて体が動かない。

「これで最後だ」

そう言つと優はその黒い先を僕に向けたまま近づいてきた。一歩一歩近づくそして一定の距離で止まる。

まだ死にたくない。

しかし僕はこの状況に関して恐怖を覚えることすら出来ない。とにかく何も出来ない。

何も考えられない。

動けない。

すでに拳銃の引き金に手はかかっている。

それを引けば優の言つとおり全てが終わる気がした。

第十章

「これで最後だ」

優の声はひどく冷たく感じられた。

最後とはこの事件に対してもあり僕らのつながりの最後をあらわしているようだった。

僕は動けず、ただその銃口を見ていた。

優がその引き金を引けばどんな音がするのだろう。

僕はどんな痛さを負うのだろう。

僕は緊張を通り越してしまったかのようにどうでもいいことを考えていた。

そう、最後なのだ。

それにしてもここは静かだ。静か過ぎる。優が圭を殺したって誰も気づいていない。永遠に気づかれることはないのだ。

その代わりに僕は容疑者となる。刑事は今頃何をしているのだろうか。

如月愛によって仕組まれた圭と僕のつながりが発見されているのだろうか。

目撃情報。

指輪。

そしていつの間にか上着のポケットに入れられていた髪の毛。

おそらく、あの時。

映画を見に行った日。

暗闇で僕の上着に触れたのは手をつなぐ合図ではなく罠であった。でも僕は怒りがなかった。

如月愛に対しても優に対しても。

美化しすぎと思われるでも仕方ないだろうが僕がこの事件の犯人のようなものだから。

僕の運命が狂ったのはあの優と如月愛の策略やあのラブレターの

せいではなく、僕の過去の失敗だったんだと思う。

上手く合致して回るはずだった歯車が僕の意気地のなさで一つ欠けた。そして間違った方向に回ってしまった。

過去に戻れたらとバカバカしくも考えてしまう。

僕は圭と、優は如月愛とそれで丸く収まったのかもしれない。いつか別れも来るだろうし行き違ふことがあってもここまで狂わなかった。

僕が後悔の文字を脳内で打ち込み続けていたとき、銃を持った優がひざについて座ってしまった。すすり泣く声が聞こえる。

「ごめん……ごめん……ごめん……本当にごめんなさい」

何か祈るように神様に何かを誓うように優は繰り返している。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

僕は動けないままそんな優をただ見つめていた。

目を真つ赤に晴らして呪文のようにその言葉を続ける。

「俺の弱さだ、お前は何も悪くないんだよ。それもわかってる。ほんの少しの気の狂いがすべてダメにしてしまった、ごめん……」

・俺が全て悪い」

「優……」

こんなに取り乱した優を僕は見たことがなかった。かける言葉も見つからなかった。

悪いのは誰だ。

悪いやつなんて誰もいなかった。

みんな悩んで苦しんで間違った道へ進んでしまった。

僕も含めてだ。

優はふらふらになりながらも再び立ち上がって僕に銃口を向けた。

「圭ちゃんはお前に気持ちを伝えようとしてこの場所にいたんだ。おかしいだろ？なんでここに来たんだと思う？高校の近くまで行っただけどうしても勇気が出なくて、悩みながら歩いてたらここまで着いたんだってさ。しばらく歩いて気づいたら何もな静かな広場があったからそこで心を落ち着けようとしたんだってさ。圭ちゃん

とお前は似てるよ。どっちも意気地なしだ。お前らきつといい恋人になれたのにな……ごめん」

そこまで言うとうちは僕に向けていた銃口を自分のこめかみに当てた。

「これで最後だ」

乾いた音が響いた。

「優、優……」

やっと僕の体が動いた。そして走り寄って優の体を持ち上げた。くたつとなった体はもう生きていない証拠だった。

「優！」

呼んでも呼んでも応答はなく、でも僕は呼び続けた。ほとんど無意識の状態で声が枯れていく。

いつまでそう呼んでいたのかはわからない。

これを走馬灯と呼ぶのだろうか。

頭の中でぐるぐるとアルバムを開くように記憶の断片が映し出されていく。優に初めて会った日。三人で仲良く帰った日。テストの勝負を持ちかけられた平和な日々。

歯車さえかみ合っていれば誰にでも誇れる絆であったに違いない。いや、絆が強すぎたからこそこうなってしまったのだろうか。

はっと気づくとサイレンの音が聞こえる。誰かがこの銃声に気づいて通報したのだろう。

僕はどうするのだろう。

どうしよう。

なあ、どうすればいいんだよ。

心の中で優と圭に呼びかけた。

こんなことってありかよ。

僕も神様を恨むよ。

あたりを見て忌々しい黒が目に入った。

まだ僕の親友の血液がべっとりついている。

「これで最後だ」

僕はつぶやいた。

優はこの銃に何発玉を込めたのだろう。

一人分だろうか。

二人分だろうか。

僕は優がやったのと同じように自分のこめかみにその先を当てた。

不思議と恐さはなかった。

サイレンの音が大きくなる。

もう一度三人で話をしたい。

永遠の時の中で。

終章

「ラストチャンスだぞ」

「何が？」

「いいか？圭ちゃんは遠くへ行っちゃうんだぞ。ずっと会えないんだぞ」

「それはわかってるよ」

「じゃあ言えよ」

「何を」

「好きってさ」

「……………」

「ほら、行けよ」

優が僕を押した。押された先には圭がいて不思議そうな顔がしている。でも少しして表情が緩んだ。

「何話してたの？教えて教えて」

僕が困っているのを優はイタズラっぽく微笑んで眺めている。ジヤスチャーで「早く言っちゃえ」としきりに伝えてくる。

僕はこれまでの人生の中で一番大きなことをやるような気持ちでひとつ深呼吸をした。

息を吸い込んで、深く吐いて。

「あのさ、圭？」

「何？」

「あ……………え……………つとさ」

「何よ」

「その……………ね。うん、まあその」

「何よ！もう！」

怒らせるとまずいと思って今まで出したことのないようなおおきな声で思わず目をつぶって叫ぶように言った。

「圭が好きだ！」

真っ赤になった僕がおそろおそろ目を開けると、目の前の圭はも
っと真っ赤になっていて、振り返ると優も真っ赤になっていた。

卒業式の日の桜はもちろんまだ咲いておらず、しんみりする空気
をよりしんみりさせる。

あともう一月すれば桜が満開になって他の花も咲いてこの辺りに
も色がたくさん咲くのだろう。

でも僕は花が散り終えた後の青々とした葉桜が好きだ。
それは青春の色に見えるからだ。

僕は最後の夢を見た。

終章（後書き）

ここまで読んでくださった方
本当にありがとうございます。

とりあえず完結できました。

書いているうちに

何がなんだかわからなくなってしまった感じですが
評価をお願いし、修正していきたいと思います。

これから

書いていきますのでよろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3613d/>

無垢な頃

2010年10月12日16時07分発行